

## ひばりクリニック実習レポート

獨協医科大学病院 臨床研修医 2年 小松 紗良

今回、私はサービス付き高齢者住宅とご利用者様のご住宅の訪問診療に同行させて頂きました。実習の中で何回か患者様を診察する機会を頂きましたが、まず感じたことはその難しさです。今までも初診の患者様とお話する機会は何度もありましたが、それは病院内という自分の馴染みのある空間でした。訪問診療では、患者様のご自宅まで伺い、患者様はもちろん患者様のご家族とも深く接することになります。関係が密になる分、その社会的背景や不安、苦悩といった精神的な面にも触れることが多く、普段以上の緊張感がありました。しかし、ご自宅でリラックスした表情でお話しされる姿を見ると、病院というのが患者様にとっていかに異空間でよそ行きの姿をさせていたのかがわかりました。

高橋先生はご家庭の状況を事細かに把握されており、ADLの低い患者様に趣味の話題を振ったり、ご家族にも労いの言葉をかけ、患者様の笑顔や素の表情を引き出し、精神的にも強くサポートしていました。また、寝たきりで常時医療的ケアを必要とする患者様のご家族が少しでも休める日ができるように心を砕き、その後の生活まで案じている姿をみて、『患者に寄り添った医療』とはどうあるべきか、将来自分が目指す医師像の輪郭が掴めたような気がします。

一年間の初期研修を終え、治療に目処がつき退院する患者様も沢山いらっしゃいました。しかし、退院調整はスタッフの方にお任せすることが多く、退院後の生活にまで気が回っていたかと思うと疑問が残ります。一人ひとり社会的背景は異なり、同じ疾患・同じ状態であっても、退院後の生活まで考え、個人ごとに判断しなければいけないと気づかされました。

最後になりましたが、大変な状況にも関わらず、今回実習を受け入れて下さった高橋先生をはじめスタッフの方々、ご利用者の方々にこの場をお借りしてお礼申し上げます。半日という短い期間でしたが、学ばせていただいたことは必ず今後の糧に致します。高橋先生の今後のますますのご発展とご活躍をお祈り致します。